

2026年9月13日（日）第570回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」グラウンドワーク三島の活動報告と地域貢献への提言



本番組は、NPO 法人グラウンドワーク三島の活動を、渡辺氏が報告するものである。前半では、スタッフの二科展入選という喜ばしいニュースをきっかけに、自然体験が芸術的創造性にもたらす好影響について論じている。

後半では、三島市の「住みやすさ調査」結果を引用しつつ、その魅力を支える水辺環境の維持活動における課題と、市民や事業者との連携の必要性を訴えている。

芸術活動と自然体験の相乗効果

このセクションでは、グラウンドワーク三島の広報スタッフである門倉奈々香さん（19歳）が、2026年度第110回二科展に、昨年に続き、連続入選したという喜ばしいニュースを報告する。

沼津市にある誠恵高校・芸術コースを卒業した彼女の今回の入選作は、古代魚「ダンクルオステウス」をモチーフにした陶芸作品である。

この成功事例を基に、源兵衛川での草刈り活動のような自然体験が、彼女の創作活動に与えた影響が深く語られる。

5～6時間に及ぶ肉体労働は、芸術家にとって新鮮な緊張感と心地よい疲労感をもたらし、心身を「空っぽ」にする強力なリフレッシュ効果があるという。

特に、冷たい水や激しい運動による新陳代謝の促進は、想像力を司る脳の「前頭葉」を刺激し、発想力を飛躍的に（10倍程度に）高めると分析されている。

川の中に全身で浸かる体験は最も想像力を掻き立てるとし、制作に没頭する「オン」の時間と、自然の中で体を動かし発散する「オフ」の時間のメリハリが、人間の潜在能力や独創性を引き出す上で極めて重要であると結論づけている。

三島市の魅力と水辺環境維持の現状

このセクションでは、伊豆日日新聞（9月7日付）で報じられた三島市の市民意識調査の結果を取り上げている。

市民の幸福感は6.82点、住みやすさは91.4%、市への愛着は88.2%、いずれも全国平均を上回る高水準であることが示された。

しかし、その魅力の根幹である「水と緑」の環境が、実は盤石ではないという現実が指摘される。

三島市の水源である富士山からの湧水は天候に左右されやすく、特に、源兵衛川は、冬場、東レからの補給水に依存している状況である。

また、市内の緑地も三島大社や鎮守の森などに限られ、大規模な都市公園が少ないために、グラウンドワーク三島が、松毛川や境川・清住緑地で植樹活動を先導し、新たな森づくりを担っている実態が明かされる。

グラウンドワーク三島の活動は、34年間で延べ45万人が参加し、これを人件費に換算すれば、数億円規模の経済的貢献に相当するが、源兵衛川での年間1500万円以上かかると想定される維持管理費は、多くは、ボランティアによって支えられている。

これまでに、日本倫理法人会や日本財団などから累計約1400万円の賞金や助成を受けて活動を評価されてきた一方で、地元行政や商工業者からの経済的支援はほとんどなく、「好きでやっているのだろう」という冷ややかな

視線を感じることもあり、地域全体での一体感の欠如に寂しさを表明している。

バイカモ保全活動の意義と協力の呼びかけ

このセクションでは、清流のシンボルである「バイカモ」の保全活動に焦点が当てられる。

バイカモは「水中花」とも称される常緑の「沈水植物」で、水温 20 度以下の清流でしか育たない。

グラウンドワーク三島では、「三島梅花藻の里」で増殖させたバイカモを源兵衛川や桜川、御殿川などに移植し、美しい水辺景観を維持している。

現在の群生地が形成されるまでには 30 年もの歳月を要しており、この美しい風景の裏には、地道な維持管理活動が続ける人々の存在があることを強調した。

市民や観光客には、景色への感動だけでなく、その活動を支える陰の人々への理解と、街全体で活動を応援する連帯感を持ってほしいと訴える。

イベントなどで水辺の魅力を活用する商工業者に対し、売上の一部を寄付するなどの具体的な協力を呼びかけている。

また、このバイカモの保全活動が、全国的に注目されており、バイカモが減少し始めている滋賀県米原市・醒ヶ井・さめがい地域から視察団が訪れ、指導を仰ぐ予定であることも報告された。